

特集・明治近代の礎をつくった幕末諸藩の教育力

薩摩藩

郷中教育が培つた薩摩の土魂

交通未発達の時代に、日本列島最南端のいわゆる僻地が、多くの偉人傑士を輩出し、明治維新の最も有力な推進力となり得たのは、一に郷中教育の制度が全薩摩藩に広がり、その精神が徹底していたからに他ならなかつた。

「泣こよかひつ飛べ」

城下には数十戸を単位として、およそ三〇の郷中があつたと言われている。

少子化が進み、子供たちの異年齢交流の減少や地域との結びつきの低下が叫ばれるなかで、異年齢集団活動による青少年育成の試みが全国各地で行われている。鹿児島には、「郷中教育」という薩摩藩伝統の縦割り教育があつた。郷中とは、「方限」(ぼうぎり)と呼ばれる区割りを単位とする自治組織のことである。言えども町内会単位の自治会組織ど

うの世代である著者が小学校、中学校時代(昭和三〇年代)には、鹿児島県内の田舎にもたくさんの子供たちがいた。お兄さんやお姉さん、弟や妹たちと一緒に遊びに行くと、田んぼに用水路がある。まずお兄さんたちが飛び越えてみせる。つぎに、年下の者が飛びぶのに躊躇していると、周り

下土橋 渡
(川内職業能力開発短期大学校教員)

の者が「泣こかい、飛ばかい、泣こよかひつ飛べ」と囁し立てる。これは、困難に出会つた時はあれこれ考えず、とにかく行動しろという薩摩人の思考法があらわす言葉で、今にして思えば、郷中教育の名残だったのである。また、鹿児島県内では、たとえば神社の掲示板などに、①負けるな、②嘘をつくな、③弱い者をいじめるな、という三つの言葉が大きな字で掲示されているのをよく目にする。これもまた、郷中教育の教えを今に伝えている言葉である。

郷中教育－郷中教育 02. bmp (1/1)

薩摩 郷中教育が培った薩摩の土魂

外城制度と薩摩藩の教育

薩摩は武の国として知られたが、一つの城楼も天守閣もなかった。鹿児島市内にある鶴丸城は、城という名はつくものの、単純な構造の屋形造りの城で、世人は「お屋形」と呼んだ。これは、一つには裏山に城山があつて天然の要害となつていたことにもよるが、「人は城、人は石垣、人は壕」という標語があつたように、人間こそが城砦であり、人間こそが墨壁であり、人間こそが壕渠であると考え、防御の根本を人間の配置においていたからであった。すなわち、薩摩藩は、鶴丸城を本城と

し、領地を外城と呼ばれる百十三の行政区域に分け、武士団を分散してそれらの領地内に住まわせ統治に当たらせた。麓集落と呼ばれるミニ城下町が形成され、その中心に地頭の居館である地頭仮屋が置かれ、ここで外城の行政が行われた。

したがつて、藩においては、土民に

領国の防衛意識を高揚させるための教育と、中央集権の実をあげる政治との連用が必要であった。教育と政治は密接に関係し、いわば政教は不可分の関係にあつた。薩摩藩における教育政策の一つに、第八代藩主・島津重豪が設立した藩校・造士館の制度があつ

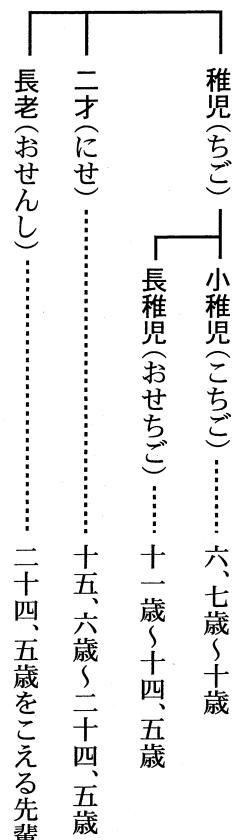
郷中の生活と教育

郷中は、青少年を「稚児」と「二才」に分けて、勉学・武芸・山坂達者（今でいう体育・スポーツ）などを通じて、先輩が後輩を指導することによつて強い武士をつくるとする組織であつた。稚児は年齢によつてさらに、小稚児と長稚児に分けられ、稚児のリーダーとして稚児頭おせちこがいた。また、二才のリーダーとして二才頭にせがしらがいて、二才と稚児の面倒をみた。

稚児と呼ばれる武士の子どもたち

たが、藩政の上に顕著な効果を示したのは郷中教育であつた。交通未発達の時代に、日本列島最南端のいわゆる僻地が、多くの偉人傑士を輩出し、明治維新の最も有力な推進力となり得たのは、一に郷中教育の制度が全薩摩藩に広がり、その精神が徹底していたからに他ならなかつた。

「稚児」と「二才」



特集・明治近代の礎をつくった幕末諸藩の教育力

は、毎日早朝、郷中内の先生の家へ走つて、いつて本読みを習い、家に帰つてくると朝食までそれぞれ本読みの復習をしたり家事を手伝つたりして過ごす。朝食がすむと今度は、馬場と呼ばれる広場や神社の境内などに集つて、馬追いや降参言わせ、相撲、旗とりなどの山坂達者によつて身体を鍛える。午後は、共に誘あつて、先輩や先生の家（復習座元）に集まり読み書きの復習をする。その後、稽古場へ行き夕方まで、剣（示現流）、槍、弓、馬術など、武芸の稽古を行なつた。

長稚児たちは、夕方から二才たちが集まつている家（夜話の座元）に行つて、郷中の捷を復唱したり自分たちの生活を反省したりする。武士の子としてよくない行いがあれば二才たちから注意を受け、場合によつては厳しい罰を受けることもあつた。

武士の子どもたちは、一日のほとんどを同じ年頃や少し年上の人たちと一緒に

緒に過ごしながら、心身を鍛え、躰・武芸を身につけ、勉学に勤しんだのである。年長者は年少者を指導すること、朝食がすむと今度は、馬場と呼ばれる広場や神社の境内などに集つて、馬追いや降参言わせ、相撲、旗とりなどの山坂達者によつて身体を鍛える。午後は、二才同志は、互いに戒めあい、修身の道に各々自重するとともに、二才頭を中心にして互いに熟議し、郷中に起る一切の問題を処理した。二才たちの手でどうしても処理しかねる時には、長老を訪ねて適宜指導を仰いだ。このように、郷中教育は、集団のなかでおこなわれ、教師のいない、異年齢によって行われた自治的な教育であつたことを特徴とした。

なお、鹿児島言葉で、大根のことを「デコン」、野菜のことを「ヤセ」、臭いを「クセ」、西郷を「セゴ」などと、約転していう。郷中を「ごちゅう」と読み、二

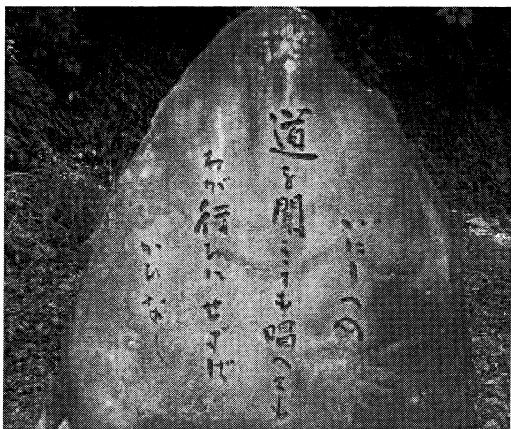
才を「ニセ」と読むのも、この地方方言の特質による。また、二才は、ボラなどの魚が二年を経て、ようやく成長したばかりの若魚を意味し、これになぞらえ、一人前の付き合いを認められた若者衆を意味している。

郷中のはじまりから成立まで

「郷中」という言葉が使われるようになり、郷中教育が完成をみるのは、江戸時代中期の安永年間（一七六四～八〇年）だが、そのはじまりは、戦国時代の伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の一〇代当主・島津忠良（日新公、一四九二～一五六八年）が試みた青少年の志操教育にあつた。

島津氏中興の祖といわれ、文武兼備の名将だった忠良公は、神仏の崇敬篤く、神仏儒の三教を良く学び、「薩摩学」、「日学」を提唱し、薩摩独特の士風と

薩摩 郷中教育が培った薩摩の土魂



日新公いろは歌・歌碑（南さつま市竹田神社）

文化の基盤を築いた。その内容は、忠孝仁義を説き、この実践を奨励するもので、四十八歳から五十五歳の間に作ったといわれる「いろは歌」にその思想が遺憾なく詠われている。「古の道を聞きたくても唱へても我が行にせば甲斐なし」ではじまるいろは歌は、郷中教育の規範となり、現代にも大きな影響を与えていたといわれる。

日新公は、毎月五、六度、諸子の子

弟を城中に召集して、四書の講義をし、「義理ノ咄」「忠義人ノ咄」などを話して聞かされたという。日新公によつてはじめられたこの「咄」の会合の試みは、公の遠逝とともに中断したが、これが新しい形式で復活すべき事情が起きてくる。

文禄元年（一五九二年）、太閤秀吉が朝鮮遠征を断行すると、薩摩から義

久公・義弘公・忠恒公を始めとして一

万余騎の精兵が朝鮮に渡った。戦争が

十年に近い長期間に及ぶに至つて、後に残留した青少年の風紀が乱れてきたのである。この時、留守居役を任せられた新納忠元は、そのことにいたく責任を感じ、風俗改善を決意した。

この目的を達成するために、忠元は、少年時代に日新公を中心として催された「咄」の会合を思い起こし、青少年たちの間に集団を結成し、その各員が何事に限らず腹藏なく話し会える組織をつくり、これを「二才咄」

と名付けた。さらに、日常守るべき数条の規約を定め、これを「二才咄格式定目」と名付け、実践させた。二才仲間はそれぞれ集団を組織して研磨に励んだが、「二才咄」への出入りは、比較的自由であり、統制のための規律もなく日常生活における成員の行動は、各自の恣意に任せていた。その状態は江戸時代の元禄五年（一六九二年）頃まで及んだようである。

しかし、太平になれた元禄時代の華美の風潮に風紀は乱れ、元禄一五年頃には、怒濤のごとく蔓延した悪風潮は容易に改まる様子もない。そのため、成員の生活・行動は厳しく規律によつて制約されるようになり、第四代藩主吉貴公は、宝永四年（一七〇七年）に、「御袖判条々」という布達を出して、二才衆が交友で遠方に行くことを禁じた。行動範囲に地域的制限を設けたことによって、「方限」という概念が生まれた。すなわち、「方限」は、二才

特集・明治近代の礎をつくった幕末諸藩の教育力

衆の不行跡・喧嘩等を取り締まる目的をもつて起きて来たものということができる。

ついに「咄相中撻」の条項に、この「方限」の概念が取り入れられ、宝暦四年（一七五四年）に「稚児相中撻」が出される。この年は、薩摩藩が木曽川治水工事（宝暦の治水工事）の命を受けた翌年のことであった。こうした経緯を経て、第八代藩主・島津重豪公の安永年間に郷中教育が完成された。

薩摩的工ビソード

薩摩出身の軍人・政治家、樺山資紀伯爵を祖父に持つた隨筆家の白洲正子さん（一九一〇～九八年）は、津本陽さん（著書『薩南示現流』（一九八三年、文藝春秋刊））に出てくる逸話を自分で紹介している。

幕末、指宿藤次郎という示現流の使い手が京都祇園で見廻組に殺された。

その時同行していた前田某という若侍はいち早く遁走してしまった。指宿の葬儀の場に、橋口覚之進という気性のはげしい若侍がいて、「お前（おはん）が、一番線香じや。先（さきイ）拝め」と言つて、参列者の中から前田を呼出した。前田がおそるおそる進み出て線香し、指宿の死体の上でうなだれていたら、橋口は腰刀を抜いて、一刀のもとに前田の首を斬つたという。首はひとたまりもなく、棺の中に落ちた。「こいでよか。蓋をせい」

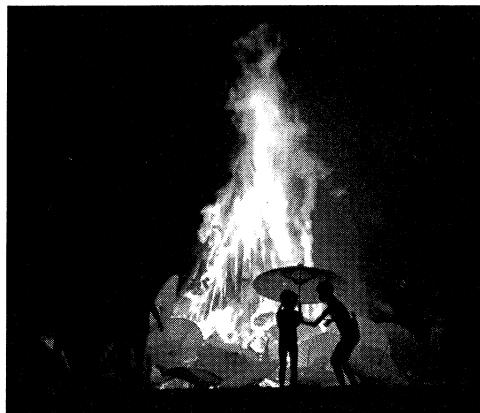
白洲さんは、何とも野蕃な話である

が、橋口にしても、前田にしても、そしも行われた。座頭とは盲人の琵琶法師のことで、座頭を招いて薩摩琵琶を弾かせそれを聴くのである。間断のない文武の講習、身心の鍛錬に対して慰安の油を差し込む催しであった。

日清戦争の連合艦隊司令長官だった伊東祐亨元帥は、降伏を決めて服毒死を遂げた清国・北洋艦隊提督の丁汝昌の遺体を送らせるため、没収した軍艦の中から商船を外して提供した。その礼節は世界を驚嘆せしめたのであるが、大本営は伊東長官のこの独断の処置を不当とし、電報を打つてその故を質した。それに対し、伊東長官はただ

からして、前田の行為は最も恥ずべき行為であり、そして郷中教育の教えがそれほど徹底していたということであろう。この話に出てくる橋口覚之進なる若侍こそ、樺山家へ養子入する前の祖父（樺山資紀）の若き日の姿だったそうだ。

薩摩 郷中教育が培った薩摩の土魂



曾我どんの傘焼き（鹿児島市）

一言、「武士の情」と返信したので、大本営はそのまま黙つてしまつたそうである。後年、同元帥は、「これも全く琵琶歌によつて培われた武士道精神の發揮にほかならない」と語られたそ

うである。

現在も伝承されている 郷中教育の行事

郷中では、三つの大きな行事が行わ

れていた。一に「曾我釜焼」、二に「妙円寺詣り」、三に「義臣伝読み」である。第一は、鎌倉時代に相模国の曾我兄弟が父の仇討ちを遂げる際、傘を焼いて松明がわりにしたという故事を懐かしみ、孝道の真髓を嘆賞する行事であつた。第二

は、関ヶ原の戦いで豊臣方として戦つた島津義弘公勢が徳川方の敵中を突破し帰鹿を果たした遺徳を慕い、不撓不屈の敢闘精神を練磨するものであつた。第三は、赤穂義士の苦衷と遠謀を偲びつつ忠魂の修練に資した。

このうち、「曾我釜焼」と「妙円寺詣り」の行事は現在も伝承されて実施されている。「曾我どんの傘焼き」は、毎年七月下旬、鹿児島市内を流れる甲突川の川べりの橋に岐阜県和傘振興会などから寄せられた和傘を積み上げ火がつけられる。炎が夜空高く舞い上がり、夏の川面を赤々と焦がすと、人びとは、五穀豊穣と洪水無災害を祈願する。また、毎年一〇月に行われる「妙

円寺詣り」では、鹿児島市内から義弘公を祀る日置市伊集院町の妙円寺（現在の徳重神社）までの片道約二〇キロを歩いて参詣する。

【参考文献】

- ・松本彦二郎『薩摩精神の真髓 郷中教育の研究』（株）島津興業・尚古集成館、二〇〇七年発行
- ・白洲正子『白洲正子自伝』（新潮文庫、一九九九年発行）

しもつちばし わたる

1949年鹿児島生まれ。鹿児島大学で工学を学び、現在、川内職業能力開発短期大学校（ボリテクカレッジ川内）で教鞭をとる。「ワシモ」のハンドルネームで、薩摩の風土、歴史、人物などについて、ウェブサイトで旺盛な文筆活動を行つている。